

『子育ての当事者』として、共に学び合いましょう

我が家には息子が二人。20歳を過ぎましたが、まだ大学院生と大学生で、親のすねかじり状態です。私もみな様と同じように子育てをしてきました。子を持つ親として、子どもの教育に携わる教員として、『子どもを育てることは、難しいなあ・・・』日々そのように感じます。保護者の皆様も、日々の子育ての中で、大きな喜びがあったり、様々な悩みがあったり・・・という事はよくあるのではないのでしょうか。親として、また保護者と教師として、互いに学び合っていければいいなあと思っています。

以前、『子どもの心のコーチング（菅原 裕子著）』という本を読みました。

今回はその本の内容から一部を抜粋、要約してご紹介します。

文字ばかりですが読んでくださいね。

親の役割は何？ ～子育ての視線は、子どもの今ではなく、未来へ～

・・・私たち親は、とにかく『今』に焦点をあてがちです。・・・

今、子どもは安全か・・・今、子どものまわりで親の望むとおりのことが起きているか・・・

『今』に焦点をあて、そのとおりにになっていないと口を出し、手を出します。

そうすることで親は、「今の安心と秩序」を手にするのです。しかし、その一時の安心と秩序に焦点をあてすぎると、子どもの一生から、自主性とそこから生まれる喜びの芽を摘み取ってしまうことがあります。

子育てをする時、私たち「親」が目指すべきは、子どもの未来です。今の子どもがどうであるか以上に、子どもが成長した姿を目指して子育てしなければなりません。今、親がやっていることの延長線上に、本当の子どもの幸せがあるかどうかを、一度立ち止まって考える必要があります。・・・

親が目指す子どもの未来。それは彼らの幸せな姿です。そして、それは、人に頼らず、人生を自分で切り開いていける自立した彼らの姿なのです・・・

『飢えている人がいたら、魚を釣ってあげますか？ それとも魚の釣り方を教えてあげますか？』

これは人を援助する時の援助者の立場を比喻的に表したもので、よく使われている例です。

魚を釣って与えることは簡単です。しかしその場合、飢える人は、飢えという問題を自分で解決することなく人を頼って生きることになります。大きくなっても人を頼って生きる人間になります。

一方、釣り方を教えられた人は例え時間はかかっても、教えるのは大変でも、いずれ自分の力で魚を釣ることが出来るようになり、そうすれば援助者を必要としなくなります。（自立するということです。）

子どもの『今』を守るために、『今の安全・安心』を守るために、安易に子どもを課題や危険から遠ざけたり、避けさせたり、人間関係に口を出したりしている事はないのでしょうか。

このことは、実は「子どものため」ではなく、親の自己満足に他なりません。

子どもの『未来』を考えた時、本当に必要なのは、子ども自身に経験をさせ、考えたり、判断したり、処理したりする方法を教え、力をつけてやることであり、『自立した子ども』に育てることです。（放任とは違います。）

自分自身の力で判断し、処理する事のできる力を身に付けさせることです。

それを実際に行うのは大変なことです。忍耐が必要です。時間も必要です。

苦勞を伴います。だからこそ、安易に『今』に焦点をあて、すぐ口を出し、手を出してしまうのです。子どもではなく、親自身の「安心と秩序」を追い求めてしまうのです。

『親』として本当に必要なこと、やるべきことは何なのか、丁寧に考えて子育てに臨みたいものです。

